

ヤコブの手紙1章22節 「みことばを行う人」

1A 様々な試練

1B 二つの家

2B 種蒔き

2A 知恵

1B 肉の弱さ

2B 神に求める心

3B 信仰

3A 正しい聞き方

1B 素直な聞き方

1C 心への植え付け

2C 受け入れ

2B 自分への欺き

1C 鏡から離れた自分

2C 表向きの自分

3C 知識だけの自分

4A 自由の律法

1B 罪からの自由

2B みこころを行う自由

本文

ヤコブの手紙 1 章を開いてください。私たちは今日から、ヤコブの手紙の学びに入ります。午後礼拝で、1 章を一節ずつ見ていきますが、今朝は、22 節に注目します。「**みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者となつてはいけません。**」

私たちは、前回までヘブル人への手紙を学んできましたが、ヤコブの手紙は、ほとんど、その続編のように思えるほど、つながっていると個人的に感じています。イエスを信じたけれども、試練や苦しみの中で、成熟へと向かわないで、信仰から退こうとしていた人々に対して、著者が警告し、また励ましていましたね。「5:14 固い食物は、善と悪を見分ける感覚を経験によって訓練された大人のものです。」と言っていました。まだ、柔らかい離乳食しか食べられていない、初歩の教えを再び学ばなければいけないと、著者は言っていました。

ヤコブの手紙は、そのような霊的幼さから、キリストに似た者、その成熟した姿に導く知恵の書と言えるでしょう。同じように、試練や苦しみ、貧しさを取り扱います。その中にあっても、いや、その

中にあるからこそ、信仰が深められることを語っています。そこで大切なのが、神のことばに対する姿勢です。ただ聞くだけの者にならず、みことばを行う人になりなさいという勧めです。

1A 様々な試練

ヤコブの手紙は、「1:2 様々な試練にあうときはいつでも、この上もない喜びと思いなさい。」という言葉から始まります。試練には、だれも遭いたくないと思います。けれども、試練によって、自分の姿が明らかになります。問題が起こっていないときは、本当のその人が信仰をもって生きているのかそうでないかが、はっきりしません。けれども、試練がやってきた時に、自分が何を信じているのかが明らかになり、神を求める人は、自分自身に頼ることができないですから、本当に神を求めるようになります。そして、神に言われることを、本気で行動とするのです。そのことによって、信じている人と、信じていない人がはっきり分かります。

1B 二つの家

イエス様は、このことを二つの家で譬えられました。「ルカ 6:46-49 なぜあなたがたは、わたしを『主よ、主よ』と呼びながら、わたしの言うことを行わないのですか。わたしのもとに来て、わたしのことばを聞き、それを行う人がみな、どんな人に似ているか、あなたがたに示しましょう。その人は、地面を深く掘り下げ、岩の上に土台を据えて、家を建てた人に似ています。洪水になり、川の水がその家に押し寄せても、しっかり建てられていたので、びくともしませんでした。しかし、聞いても行わない人は、土台なしで地面に家を建てた人に似ています。川の水が押し寄せると、家はすぐに倒れてしまい、その壊れ方はひどいものでした。」岩の上に家を建てているのか、それとも、土台なしで家を建てているのかのどちらかです。ここでは、川の水がやって来ることが試練です。その試練の中で、聴いているみことばをしっかりと保つ人は、びくともしませんが、ただみことばを聞いているだけであれば、またたく間に倒れてしまいます。

2B 種蒔き

主は、種蒔きの譬えでも、同じことを言われました。「ルカ 8:13 岩の上に落ちたものとは、みことばを聞くと喜んで受け入れるのですが、根がないので、しばらくは信じていても試練のときに身を引いてしまう、そのような人たちのことです。」表向きは、良く信じているように見えるのです。けれども、何か試練が来ると、信仰から引いていってしまいます。では、試練の時にも実を結ぶ人はどのような人なのでしょう。「8:15 しかし、良い地に落ちたものとは、こういう人たちのことです。彼らは立派な良い心でみことばを聞いて、それをしっかり守り、忍耐して実を結びます。」みことばを聞いて、聞くだけでなく、それをしっかりと守ります。そして、たとえ神がおられるような状況でなかったとしても、それでも忍耐して信じます。そうすることによって、聖霊が忍耐の内に、キリストに似た者としての実を結ばせてくださるのです。

信仰というのは、目に見えないからこそ、その威力を発揮します。目に見えていたら、それは既

に信仰ではありません。それで、心で受け入れた神のみことばを、信仰を全力で働かせて、忍耐して信じていくのです。そのうちに、自分でも気づぬうちに、主に似た品性や特質が表れてきます。これが、みことばを聞くだけでなく、行う者になるということの、一つであります。

2A 知恵

もう一つの背景に、知恵があります。「1:5 あなたがたのうちに、知恵に欠けている人がいるなら、その人は、だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に求めなさい。そうすれば与えられます。」

1B 肉の弱さ

私たちは、試練を試練だと感じる時というのは、どういう時でしょうか？それは、なぜ、今、自分が通っていることが起こっているのか、理解ができない時です。何が正しいことで、良いことなのか分からなくなる時です。この状況について、神のみこころが分からなくなる時です。パウロは、苦しみについて、ロマ書 8 章後半で語り始めています。そこで、私たちの祈りを助ける御霊の働きについて紹介しています。「8:26 同じように御霊も、弱い私たちを助けてくださいます。私たちは、何をどう祈ったらよいか分からないのですが、御霊ご自身が、ことばにならないうめきをもって、とりなしてくださるのです。」何をどう祈ったらよいか分からないという、弱さを私たちは持っています。したがって、私たちは自分たちの理解を超えたところの、神の知恵が必要になるのです。

2B 神に求める心

ここに書いてあるように、「だれにでも惜しみなく、とがめることなく与えてくださる神に」求めます。私たちの考えや知恵は、すべて尽き果てて、ただ神にしか答えはないというところにまで、試練の中ににおいては、立たせられます。いや、元来、そうでないといけないのです。自分たちは、ただ神により頼むように、神に造られているのですから。そして、神から独立して、善悪の知識の木からの実を取って食べて、それで自分たちで判断しようとしています。けれども、それは本来から離れた人の姿であり、本来に戻るためにも、主は試練をお許しになられているのです。

3B 信仰

そして、当然ながら、知恵をいただくために、信仰を十分に働かせないといけません。人間的には、怒る。反発する。落ち込む。自暴自棄になって罪に陥るなど、仕方がないことが起こります。けれども、そんな中にあっても、主がみことばを实践する機会を与えてくださるのです。そこで、疑わずに、信じて知恵を求める必要があります。「1:6 ただし、少しも疑わずに、信じて求めなさい。疑う人は、風に吹かれて揺れ動く、海の大波のようです。」とあるとおりです。

3A 正しい聞き方

そこで本文を見てください。「みことばを行う人になりなさい。自分を欺いて、ただ聞くだけの者と

なっていないけません。」と、ヤコブは言っています。ここは、あたかも、みことばを聞いて信じるということだけではないのだ、と教えているかのように聞こえます。後に、ヤコブは、「2:24 人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではないことが分かるでしょう。」とも言っています。一見、パウロが説いた、信仰によって義と認められることの教えから、離れているように聞こえます。しかし、決して矛盾していません。

1B 素直な聞き方

救いは、神の恵みにより、信仰によって与えられるものです。よい行いによって救われるのではありません。そして、信仰は、神のみことばを聞くことによるものです。しかし、ここで「信仰」という時に、また、聞いているという時に、どのような聞き方をしているのか？どのような信じ方をしているのか？が、問われているのです。みことばを聞いて、本当に信じているのならば、その信じていることが、自ずと行いに現れるはずで

ずと前に、私はスーパーマーケットで、バイトをしていました。その時に、泣きながら迷子になっている小さな子がいました。お母さんの声が聞こえました。そうしたら、一目散に走っていくのです。この子は、お母さんを全幅の信頼をもって、より頼んでいます。そして、お母さんの声を聞きました。そうしたら、一目散に走っていくという行動、行いに出たのです。彼のお母さんへの信頼が、走り寄っていくという行いに現れました。

もう一つ例を出しましょう。行いのない聞き方とは、何かを説明したいと思います。飛行機に乗られた方は、離陸する時に、事故が起こった時の避難のための案内放送が流れるのをご存じですね。それをまともに聞いている人は少ないです。しかし、実際に飛行機が激しく揺れたとかして、酸素マスクが天井から降りてきたとします。そうしたら、機内乗務員のいう指示に食い入るようにして聞き、その指示に従うでしょう。その指示が、自分の命そのものを支えているからです。離陸時の聞き方が、行いのない、聞くだけのことです。乱気流によって激しく飛行機が揺れている時には、行いのともなう聞き方をしているのです。

後者が、ヤコブが言っていることです。試練にあっている時に、また知恵が欠けている時に、主から語られていることは、主のみにしか知恵と力がないことを知っているので、しがみつくようにして聞き従うのです。当然ながら、その信仰は行いに現れます。

このことは、いわゆる律法主義ではありません。律法主義によっては、実は、神の命令を行っていないのです。律法主義は、本来、行わなければいけない神の命令を行わず、その心の頑なさを隠すために、本質的なところではない人間の戒めに取り組んでいるのが問題なのです。例えば、良きサマリア人の話がありますが、半殺しになっている人を通り過ぎた、祭司やレビ人は、自分たちの律法を守るのが忙しかったのだそうです。神の命令、憐れみを示すことに聞き従わないことを、

他の仔細な戒めを守ることで隠していたのです。律法の行いを強調しながら、実は神の戒めを行っていないという問題です。

1C 心への植え付け

手前の 21 節を見てください。「ですから、すべての汚れやあふれる悪を捨て去り、心に植えつけられたみことばを素直に受け入れなさい。みことばは、あなたがたのたましいを救うことができます。」心に植え付けられたみことば、とあります。頭の中で納得するだけの、みことばではありません。心に植え付けられているのです。

2C 受け入れ

そして、「素直に受け入れなさい」とありますね。受け入れるということは、自分のあり方を調整しないと、変えていかないと受け入れられません。みことばを把握するのではなく、受け入れるのですから、自分の生活を支配するのは神のみことばであり、自分が、みことばを変えることも、取捨選択することもできません。生活のあらゆるところで、神のことばが影響力を持っているように、神のことばが、働くように、ゆだねているのです。

テサロニケ人への手紙第一では、信仰と行いが別物ではないことを教えています。「1:3 私たちの父である神の御前に、あなたがたの信仰から出た働きと、愛から生まれた労苦、私たちの主イエス・キリストに対する望みに支えられた忍耐を、絶えず思い起こしているからです。」信仰から出た働き、とありますね。そして、2 章 13 節には、こうあります。「こういうわけで、私たちもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたが、私たちから聞いた神のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実そのとおり神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いています。」みことばが、信じている者に働いているのです。これこそが、みことばを聞くだけではない、行いのともなう信仰なのです。

2B 自分への欺き

そして、「自分を欺いて、ただ聞くだけの者となってはいけません」と言っています。私たちは、人を欺くことについてはよくわかっていますが、実は自分自身に嘘をつくことがあります。自分のことは、自分で分かっている。自分の真実は知っていると反発するかもしれませんが、いいえ、自分に対して偽ることは十分にできるのです。

1C 鏡から離れた自分

そのことを分かり易く、ヤコブは次の節で説明しています。「1:23-24 みことばを聞いても行わない人がいるなら、その人は自分の生まれつきの顔を鏡で眺める人のようです。眺めても、そこを離れると、自分がどのようであったか、すぐに忘れてしまいます。」

興味深いことに、この鏡を見ているのは男です。「人」と訳されていますが、原語は男です。したがって、ちょうど朝にちょっとだけ顔を見て、その後、自分がどうなっているのか忘れていた男性に似ています。女性であれば、トイレに行った時にどうなっているか気をつけますが、あるいは電車の中でさえ行かないですね。けれども男なら、髪の毛が、寝癖がついているのに全然気づかないことがあります。

2C 表向きの自分

同じように、霊的には、表向きは信じているようにふるまっています。けれども、本当の自分を忘れていたのです。自分は神を知っており、神に従っている人だと思い込んでしまいます。髪の毛の寝ぐせがあるのに、それに気づいていないように、本当の自分があるのに、それに気づいていません。試練や困難が来ると、それが、ますますはっきりと出てきますが、問題が起こらないうちは、表面的な、外見の自分に留まっているのです。

3C 知識だけの自分

そして、みことばは知識として知っているかもしれませんが、知恵になっていません。つまり、具体的な行動や生活に、行かされないのです。ある人が、知識と知恵の違いをこのように教えました。黒と白のしまの、リスのような動物は？と聞かれたら、知識はスカンクと答えます。しかし、知恵は、「絶対に、今、逃げろ」です。アメリカでは、スカンクを車でぶつけてしまって、その最後に出すおならは、車をどんなに洗浄しても消えないほど、強烈なのだそうです。どんなに知識があっても、それが知恵の中で生かされないのです。

4A 自由の律法

こうやって自分を欺いてはいけないことを、ヤコブは勧めます。そして、こう言っていますね。「1:25 しかし、自由をもたらす完全な律法を一心に見つめて、それから離れない人は、すぐに忘れる聞き手にはならず、実際に行う人になります。こういう人は、その行いによって祝福されます。」

ちょうど、トイレに行っても、電車の中でさえ鏡を忘れずに見ている女性のようなですね。同じように、みことばを一心に見つけて離さないことは、私たちに必要です。そうすると、自由をもたらすのです。神は完全な方であり、そのみことばは完全です。その命令は、自由をもたらします。

1B 罪からの自由

イエス様は言われました、「ヨハ 9:32 あなたがたは真理を知り、真理はあなたがたを自由にします。」聞いているユダヤ人は、自分たちは奴隷になったことがないと言い張りましたが、イエス様は、「罪を行っている者はみな、罪の奴隷です。」と言われました(34 節)。罪からの自由です。みことばに留まっていることによって、罪の奴隷から、神の奴隷になっています。

2B みこころを行う自由

そして、みこころを行う自由が与えられます。イエス様は、父なる神の命令を自由に守り行うことができました。同じように、私たちはイエス様の言われていることに、素直に聞き従うことができるようになります。聞き従う時には、御霊が働きます。人が信仰をもって従順になっている時に、御霊が働いてくださり、それを行うことができるようにしてくださるのです。足なえに、立ち上がりなさいと命じられたら、それに従おうとした時に立ち上がる力が与えられます。水の上に来なさいと命じられたら、ペテロは水の上を歩きました。同じように、敵を愛しなさいと命じられて、そこには心の戦い、葛藤がありますが、ついに明け渡しますと、心にキリストの思いが与えられ、敵のために祈り、祝福することができます。自分ではできないけれども、神のみこころを行う自由が与えられるのです。

どうか、ヤコブのこれからの学びで、信仰が本物となっていきますように。これまで、それっぽく、クリスチャンっぽく生きていたかもしれませんが、ここで、リアルになっていくことを祈ります。